



## 東北大学生のための教育・学習支援

著者	横山 美佳
雑誌名	東北大学附属図書館調査研究室年報
号	1
ページ	47-54
発行年	2012-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/53757">http://hdl.handle.net/10097/53757</a>

# 東北大学生のための教育・学習支援

## —平成 22～23 年度の活動報告—

横山 美佳

### はじめに

東北大学附属図書館では、学生が学習する上で学術情報探索法の基礎を習得することが重要であると考え、テキストの作成や授業への参画などを行ってきた。テキスト『東北大学生のための情報探索の基礎知識』は平成 15 年度から継続刊行し、新入生全員に配付してきた。全学教育科目の授業には平成 16 年度から参画し、図書館においても各種講習会を実施してきた。しかしこれまではどちらかというと図書館単独の活動が中心だったため、今後は、学内の関連部署、教員、授業等との連携を強化し、本学の教育活動にさらに貢献できる取り組みとして行っていかなければならないと考えている。

本稿では、平成 22 年度以降、当館の教育・学習支援活動を次のステップに進めるために、模索しながら行ってきた活動について報告することとしたい。

### 1. 全学教育科目授業の改善

附属図書館では、平成 16 年度から全学教育科目のカレントピックスで「大学生のための情報検索術」(第 2 セメスター、金曜、5 講時)を教員と共同で開講してきた。学部 1 年生を主な対象とした、レポート作成法の講義、検索ツールの実習、実際の研究活動に関する講義と、大きく分けて 3 つの構成になっている。途中に 2 件の課題を提出、最後に各自テーマを設定したレポートの提出がある。受講者数は 50 名から 70 名程度で、本・分館、図書室の図書館職員で構成される図書館情報教育支援 WG(以下「WG」という)全 12 名で企画し、代表教員の当館副館長をはじめ 5 名の教員と本 WG との共同で実施している。

平成 23 年度からは情報検索が何に役立つのかがシラバスを見た学生にわかりやすく伝えられるよう、授業名を「『レポート力』アップのための情報探索入門」に変更するほか、平成 22 年度以降授業構成や内容の見直し、評価の導入等小さな改善を重ねてきた。

#### 1.1 授業構成・内容の見直し

##### (1) 平成 22 年度

平成 22 年度の見直しは 2 点あった。1 点目は第 1 週目の授業である。従来は図書館の歴史や利用案内の説明が中心だったが、第 1 週目は学生が履修科目を選択する上で重要であるため、この授業で目指すところ、高校と大学の違いなどを盛り込んだ。

2 点目は履修の中盤で行う、検索ツールの実習の授業構成である。従来は「図書・雑誌の探し方」「論文の探し方」「電子ジャーナル」といった順番で行っていた。しかし、学生が日頃使用しているサーチエンジンの効果的な検索方法及び注意点をはじめに学ばせ、これまでの無意識の検索行動を意識化させた上で学術情報検索へと導くため、冒頭に「サーチエンジンから学術情報検索へ」を組み込んだ。そして最後のまとめとして、「図書館でのグループ演習」を取り入れた。

平成 22 年度

第 6 週 サーチエンジンから学術情報検索へ

第 7 週 図書・雑誌の探し方

第 8～9 週 論文の探し方

第 10 週 新聞記事の探し方

第 11 週 図書館でのグループ演習

## (2) 平成 23 年度

平成 23 年度はさらに改善を加え、新たに「レポート作成時のチェックポイント」の時間を設けた。前年度に提出されたレポートから、この授業で目指すレポートが十分に理解されていないと判断したからである。また、学生からのアンケートにレポート作成法の講義を履修の中盤(学生がレポートを書き始める頃)に行って欲しいとの要望が寄せられていたことから、レポート作成法の講義の復習を兼ねてレポート形式、参考文献の書き方等を確認する工夫をした。

そのため、レポート作成時に活用可能な「レポート作成チェックリスト」を作成するとともに、この授業で目指すレポートの完成形を理解しやすくするため、WG メンバーがサンプルレポートを作成し授業で配付した。

平成 23 年度

第 6 週	サーチエンジンから学術情報検索へ
第 7 週	図書・雑誌の探し方
第 8～9 週	論文・新聞記事の探し方
第 10 週	レポート作成時のチェックポイント
第 14 週	図書館でのグループ演習

## (3) 図書館でのグループ演習

平成 22 年度のグループ演習は、授業で取り上げた検索ツールを組み合わせた情報探索力を養うことを目標に、3 名のグループで演習課題に取り組んでもらった。課題は、あらかじめ設定したテーマ・構成で、レポートを書くことを想定して文献探索を行うというものである。



写真 1: グループ演習風景

演習後のアンケートから適切なツール・キーワードの選択が重要であることを理解してもらえたことはわかったが、課題が最近の話題からの出題であったため、パソコンでの検索が中心となり、検索と図書等の資料をうまく結びつけることができなかった。そこで平成 23 年度は見直しを行い、図書を実際に手にとってもらうように、次のような演習構成とした。

- ①全体を 2～3 名のグループに分け、まず演習方法の説明を行う。
- ②1 人約 10 分ずつ、レポートのアウトラインについてまとめた「課題」(途中提出課題)を基に、自分が執筆予定のレポートについて内容を説明し、他の 2 人から意見をもらう。(レビュー)
- ③他のメンバーがレポートを執筆する際に有用となりそうな図書を、1 冊ずつ持って来る。図書を探す時は、配付した分類表を利用して直接書架に行って探す。質問や相談は、各所に配置した WG 担当者が対応する。(レコメンド)
- ④見つけた図書を相手に渡してそのまま借りるかどうかが判断してもらう。
- ⑤アドバイス記入用紙に相手へのアドバイスを書き、本人に渡す。

レポート提出に向け、レポートのアウトラインについて他者と意見交換することで自分の考えを整理すると共に、他者のアウトラインを客観的に見ることでレポートに必要なものを再確認してもらう。最後に、パソコンを使わずに書架を眺めて図書を探すブラウジ



写真 2: 相手へのアドバイス記入光景

ングを体験することで、図書を実際に手に取ってもらうという流れである。

学生からは、「他人に説明したりアドバイスをもらうことで改善点が見つかった」、「ブラウジングの利点や特徴がわかった」、「今後も図書館を利用したい」等のポジティブな評価が多数寄せられたことから、当初の目標が達成できたと考えている。この演習方式は、「レビュー&レコメンド方式」として定着させたい。

## 1.2 授業評価

### (1) 実習の評価

平成22年度から、実習の授業において授業評価を試みた。毎回授業の最後に授業の内容について問題を出し解答してもらう「理解度チェックテスト」を実施した。解答を集計し、理解が不足していたと考えられる場合は次週に補足説明を行う。また集計結果を基に、授業の目標設定、講義内容・方法、実習、理解度チェックテストの設問について、良かった点をまとめて授業評価を行い改善に役立てている。

理解度チェックテストでは本学の高等教育開発推進センターで提供しているミニットペーパーを利用した。ミニットペーパーは、自由記述様式とマークシートによる質問様式の2種類あり、出欠確認にも使用できる。講義では、自由記述様式を用いて最後に学生からコメントを書いてもらい、質問があれば次週に担当教員に回答していただいた。理解度チェックテストではマークシートの様式を用いた。

グラフは「サーチエンジンから学術情報へ」の理解度チェックテストの集計結果である。「情報への接し方」「情報の信頼性」「ネット上の情報の利用方法」「インターネット情報の特徴」に関する設問をし、理解度を測った。この授業では平成22年度の結果を踏まえ、平成23年度はレポート作成における「情報の接し方」についての説明を丁寧に行うことで、理解度がアップした。

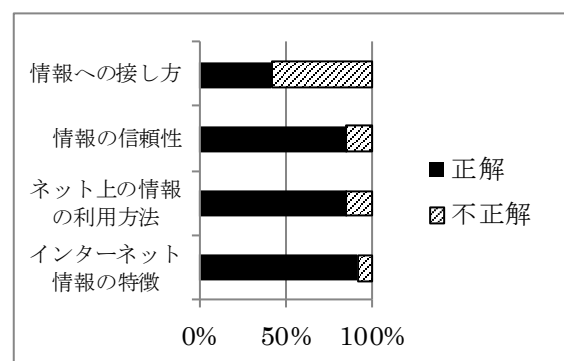


図1: 理解度チェックテスト(平成22年度)

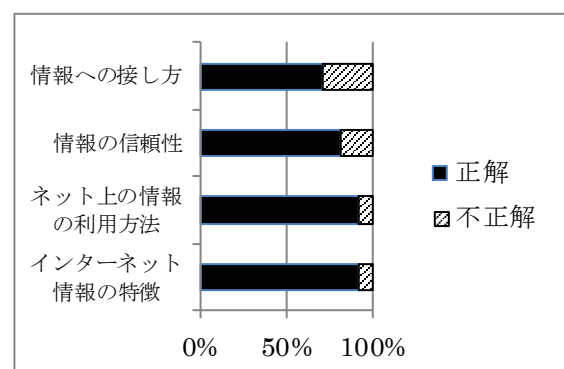


図2: 理解度チェックテスト(平成23年度)

### (2) レポートの評価

履修の途中では、最終レポートを執筆する前の準備作業として課題が2件ある。1件目はテーマ・キーワードを設定した文献調査で、2件目はレポートのアウトライン作成である。最終レポートは、各自設定したテーマで4千から6千字で提出してもらう。課題は学生1名につきWGメンバー2名体制で、レポートは3名体制でチェックしコメントを書いた。課題もレポートも学生に返却して、結果をフィードバックしている。図3～8に示すのが、平成22年度および23年度のレポートの採点結果である。レポートの形式では、項目立て・参考文献表・引用という点について、内容では一貫性・論理性および結論の明示について、平成23年度の平均点が大幅にアップし評価項目全体のバランスもとれてきている。これに伴い、レポート(40点満点)の点数分布も高まっている。

### (3) 講義の感想

講義では、学生に任意でミニットペーパーに感想や質問を書いてもらい、質問があれば次週の授業の

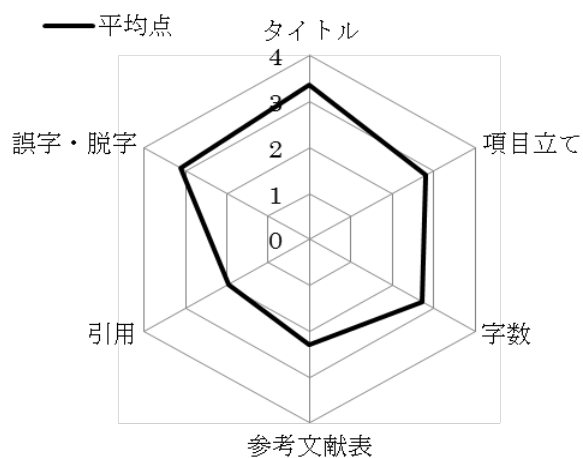


図 3: レポートの形式的評価(平成 22 年度)

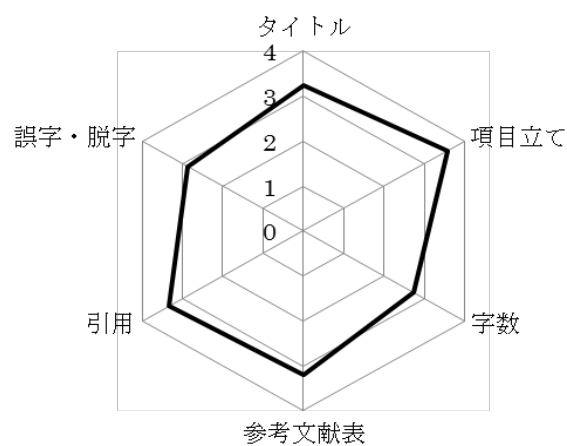


図 4: レポートの形式的評価(平成 23 年度)

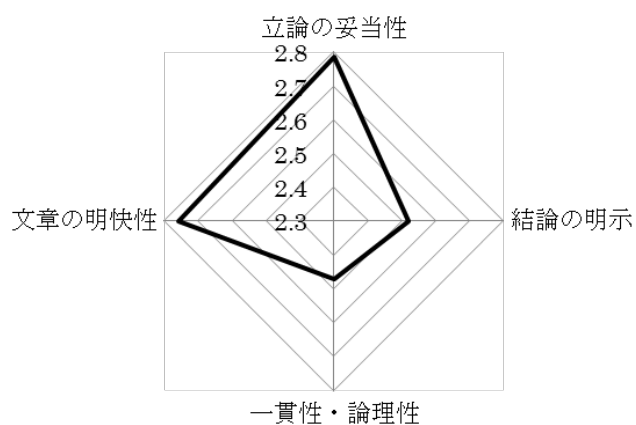


図 5: レポートの内容的評価(平成 22 年度)

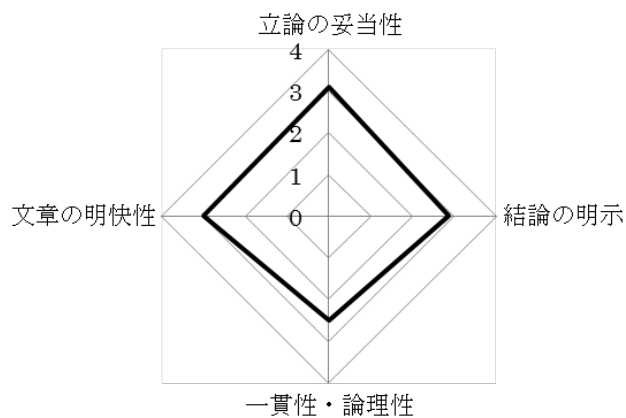


図 6: レポートの内容的評価(平成 23 年度)

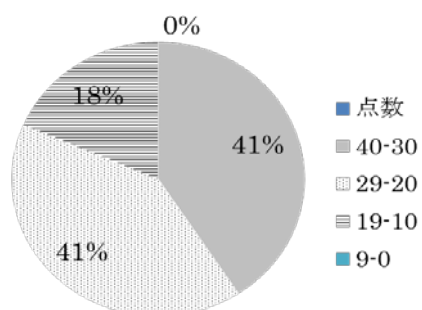


図 7: レポートの点数分布(平成 22 年度)

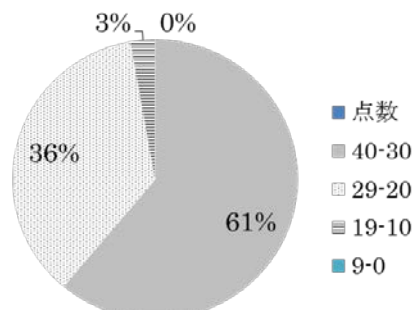


図 8: レポートの点数分布(平成 23 年度)

中で補足・回答したり、回答資料を配付したりしている。

当館の副館長であり医学系研究科教授でもある柳澤輝行先生による第1週目の講義では、授業や図書館に関することだけでなく、先生のご専門と「情報」に関連させた、「生体から見た情報の伝達」に関するお話もあった。図9のグラフは、この授業に寄せられた感想をキーワードにより分類し集計した結果である。おおまかではあるが、学生が講義のどの部分に関心を持ったかがわかる。

生命に関する話を受けて、「先生は生命というものをどの様にとらえておられますか」との質問もあり、次週回答と共に柳澤副館長が学生に推薦する図書100冊のリストを配付した。成績公表後の成績に関する学生からの問合せにも、柳澤先生から心のこもった誠実な回答をしていただき、学生から感謝の言葉が寄せられている。教員の強力な主導により内容の濃い授業にすることができた。

以下はアンケートに寄せられた学生のコメントの一部である。

- ・今まで書いていたレポートとは大違いで、みちがえるほど良くなっているのがわかり、うれしくなりました。こんなに役に立ったと思う授業はめったにないです。
- ・レポートの書き方がわかっただけでなく、レポートを書くことや図書館を利用することが楽しいと思えるようになりました。これからの大学生活で必要不可欠な知識を身につけることができとても良かったです。

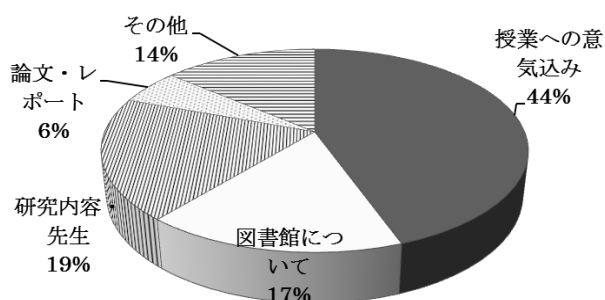


図9: 第1週授業への感想(平成23年度)

- ・受ける前と受けた後でレポートそのものに対する考

え方や姿勢がかなり変わりました。中間・最終レポートを添削して返却していただけるのも、他の授業にはないサポートでとても役立ちます。それだけ手間がかけられている以上難しいとは思いますが、他の日時でも複数開講した方がよいと思います。

熱意のある丁寧な授業を心がければ、そのまま成績に反映する。一方で対応できる受講者数には限りがある。全ての学生に学術情報探索の基礎を習得してもらうためには、例えば授業を基礎編と実践編に分ける等、履修構成を見直す必要があると思う。基礎編は基礎的な探索法を多くの学生に伝えるものにして、「基礎ゼミ」等他の授業の1コマをお借りして講習会を実施する。実践編はレポート作成法まで踏み込んだ授業とし、ある程度人数を絞り込んだ上で内容をさらに深める、といったことが考えられる。

## 2. 講習会の実施

### 2.1 情報探索のススメ

授業以外にも、附属図書館では情報探索に関する講習会を実施している。本館では平成22年度から、入門編、初級編、中級編等のレベル別のメニューを用意した「情報探索のススメ」を開催している。入門編は参加しやすくするために所要時間を30分とした。また館内利用者に講習会の存在を知ってもらうために、開催場所を利用者の目に付くメインホール(1号館1階)とした。

#### 「情報探索のススメ」メニュー

入門編	学術情報の探し方、図書の探し方、雑誌の探し方、新聞記事の探し方、事柄の調べ方
初級編	大学生のためのレポート作成入門 大学生のためのレポート作成法セミナー レポート・論文を書くための情報探索法
中級編	日本語論文の探し方 外国語論文の探し方 卒論のための情報探索法(論文編) 卒論のための情報探索法(統計編) D-1 Law, JapanKnowledge(外部講師)



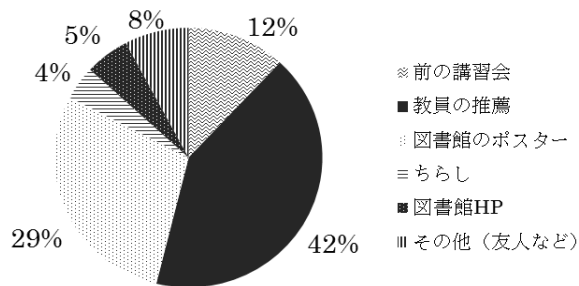


図 10:「図書館のススメ」への参加のきっかけ

平成 22 年度は 89 回で 139 名、平成 23 年度は 32 回で 206 名。参加者は 4、5 月に集中している。アンケートのうち注目すべき点は、講習会への参加のきっかけで、「教員の推薦」が最も多かったことである。Twitter での教員の呼びかけで参加した学生も多かった。まずは、情報探索法が重要であると認識していただいている教員の協力を得ることが重要だと感じた。教員への広報を Twitter 等を含めて工夫していきたい。

## 2.1 オーダーメイド講習会

教員からの依頼により授業の中で実施する講習会は、授業ごとに内容をカスタマイズするオーダーメイド形式で行っている。基礎ゼミやプレゼミ等の授業を担当している教員から依頼を受け、平成 22 年度は 11 回 181 名、平成 23 年度は 14 回 204 名の参加があった。約 6 割は毎年申し込んでくれるリピーターである。オーダーメイド方式では、教員のニーズに合った内容をより多くの学生に習得してもらうことができると考えている。前述の授業の基礎編をオーダーメイド方式で行うことも考えられる。授業に学生が来るのを待つだけでなく、「学生のいる授業」にアウトリーチしていく必要があると思う。

## 2.2 レポート作成法セミナー開催の試み

平成 23 年度は 6 月に、「大学生のためのレポート作成法入門」「大学生のためのレポート作成法セミナー」を実施し、61 名の参加があった。内容は「レポート作成に役立つ情報探索法」から一歩踏み込ん



写真 3: レポート作成セミナー



写真 4: リーダーズコーナー

だ「レポート作成法」である。始めに概論的な「大学生のためのレポート作成法入門」を講義形式で行い、その受講者の中から希望者を募って、「体裁と文章」「内容の整え方」の特論的セミナーを実施した。本館の飲食可能なラウンジで、昼休みにおにぎりなどを食べながら行ったというのも新たな試みである。セミナーでは日頃からレポートを書く際に困っている点、悩んでいる点について様々な質問があり、講師が丁寧にアドバイスした。今後も同様の講習会・セミナーの企画を行いたいと考えている。

## 3. 英語多読「リーダーズコーナー」設置

平成 23 年度、本館メインホールの一角に、英語学習を支援するため、英語多読用の教材を集めた「リーダーズコーナー」を設置した。多読法は、多くの原書を読むことにより英語力を高めていく学習法である。多読専用資料の選定からサービス、コーナー作りに至るまで、多読法を取り入れた授業を行っている高等教育開発推進センター講師のシャーロン・ベン先生と協力して行っている。

平成24年度からは多読法を取り入れた授業が増えるとのことなので、教材もさらに充実させる予定である。また図書館を会場にした、英語多読法に関する講演会の開催も計画中である。今後も、教員や授業との連携をいっそう強化した教育・学習支援活動に力を入れていきたい。

## 4. 教員・学生の調査

以上のように附属図書館では、これまでテキスト作成や授業への参画等、全国でも先駆的とされるものを基盤として様々な教育・学習支援活動を行ってきた。しかし授業・講習会を合わせても、受講者数は年間500名弱である。本学の新生が2千数百名なので、多くの学生が受講できていないという状況である。また英語多読コーナー等の授業との連携は、まだ始まったばかりである。これから図書館が、どのような形で本学の教育・学習に貢献できるのかを探るためには、教員のニーズや学生の学習行動等の調査を行う必要があると考え、平成23年度にWGでその準備に着手した。

### 4.1 教員に対する調査

教員については以下の点を調査の目標に掲げ、大学の出版物や雑誌論文、シラバス等約50件の文献調査を行った。

- ・東北大学の学生に求められる能力、学習・研究に必要なスキルは何か。
- ・教員から見て学生はそれらの能力やスキルを身につけているか。
- ・それらの能力を学生に習得させるためにどのような教育活動を行っているか。
- ・図書館で行っている教育・学習支援活動を教員はどのように評価するか。

本学では、学生に求める能力について、大学全体として具体的に挙げられているものはないが、各学部、全学教育や基礎ゼミにおいて一部言及されており、初年次教育におけるレポート作成や文献探索

法の必要性も挙げられている。全学教育や基礎ゼミ担当教員からは、レポート作成や文献探索方法に関するスキルが不十分なので、全学で指導に取り組むべきとする声もある。

まずは、基礎ゼミや情報探索の重要性を認識してくださる教員から、インタビューやアンケート調査を実施し、それをふまえて次の展開を考えていく。

### 4.2 学生に対する調査

学生については、学術情報探索法に関する教育・学習支援活動、特にレポート作成に必要な能力について、「何を」「どの様に」教えることが効果的であるかを明らかにするため、以下の点についてグループインタビューを実施した。

- ・レポートに関する意識・行動
- ・授業課題の出題状況や教員の影響力
- ・情報探索能力・使用しているツール
- ・生活・学習行動

平成23年10月に図書館の学生アルバイト5名を対象にプレインタビューを行い内容を見直した上で、平成24年2月に本番インタビューに臨んだ。

調査に応じてくれる学生は、図書館内外にポスターを掲示し公募した。その結果、文系の学部1・2年生が2グループ、文系の3・4年生、文系の大学院生、理系の大学院生が各1グループで、計5グループ14名に実施することができた。その結果については現在分析中であり、次の機会に公表したい。

調査活動は、WGの活動の一環として毎年継続して行いたいと考えている。

### おわりに

この2年間、少しずつだが教員と協力しながらの活動を通じて、大学の教育・学習活動において図書館が関わることが、まだまだあるのではないかとの思いを強くした。教員や学生に対する調査は、改めて今後の方向性を見つめ直し、具体的なプランを考えるきっかけになると考える。そして「東北大学生のた



めの教育・学習支援」を、さらに大学全体を見回した  
ものへと展開させていきたい。

(よこやま みか， 附属図書館情報サービス課参考  
調査係長)